

第五惑星アスカ①

わく せい

失われた惑星

六道 慧



富士見ファンタジア文庫

イラスト



富士見ファンタジア文庫

だいごわくせい
第五惑星アスカ①

うしな わくせい
失われた惑星

平成元年 5 月 25 日 初版発行

著者——^{りくどう}六道^{けい} 慧

発行者——中井茂雄

発行所——株式会社富士見書房
〒102 東京都千代田区富士見1-12-14
電話 03(261)5375(代表)
振替 東京7-86044

印刷所——旭印刷

製本所——多摩文庫

落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります

©Fujimishobo 1989, printed in Japan
ISBN4-8291-2316-8 C0193

第五惑星アスカ①
わくせい
失われた惑星



富士見ファンタジア文庫

財団法人日本科学協会

編・本文イラスト
高田明美

目次

プロローグ

第一章 ターミネイト

第二章 オメガ

第三章 アスカ・クライシス

第四章 フナム・ラファール 銀星鳥

第五章 D計画

第六章 ゼノンの罠わな

あとがき

267	233	199	165	104	57	14	5
-----	-----	-----	-----	-----	----	----	---

プロローグ

赤い花が、辺り一面に咲き誇っていた。やわらかな光が木々の隙間から洩れ、優しい光を花畑に投げかけている。聞こえてくる小鳥のさえずり、風に揺れる赤い花、その間を舞う白い蝶……。

なんの変哲もない、平和な山奥の風景だった。時折、栗鼠や兎が横切っていく他は、乱暴な侵入者もない。静かな、静かな、時が過ぎていく。

不意に、がさごと音がして、男が姿を現した。がっしりした長身に、無造作にGジャンを引っかけていた。髭面の顔は熊みたいだが、その目は驚くほど澄みきっている。穏和な、あたたかい雰囲気を持つ男だった。

「これは……」

男——高樹誠一は、花畑を見て絶句した。声もなく、高樹はその場に数分間、立ち尽く

していた。

やがて、気を取り直すと、そろそろと歩を進め、かがみこんで花を見た。一本の赤い花に、手を触れる。

「やはり……タンポポか」

高樹はつぶやいた。その赤い花の葉は、間違いなくタンポポの形状を示していた。しかし、花は似ても似つかない、異様な形をしていたのである。

本来ならキク科に属するはずの花びらの形が、バラの花びらのようだった。そして、おかしいことに、花の先にもうひとつ花が咲いていた。親子花という感じだった。先の方にはやや小ぶりの花が開いている。

さらに異常なのは、その大きさだった。ひとつの花の大きさが、一メートル以上もあった。大きいやつになると、二メートル近い。

高樹は、担いでいたリュックを降ろすと、中からシャベルとビニール袋を出した。タンポポの根元をかなり深く掘って、花を採取した。慎重にビニール袋へ入れる。ポリバケツ用のかい袋だったが、それでも赤い花が頭をのぞかせていた。

次いで高樹は手帳を取り出した。素早くペンを走らせる。

一九八二年、九月。I 県 T 村近くで採取する。放射能汚染の影響であると思われる……。

高樹は、その辺りの位置や地図も、細かく書き添えた。大学で生態学を教えている若き助教は、植物の異常にいち早く気づき、休みになると、こうしてあちこちを調べているのだった。色々な場所——例外なく原子炉の周辺——で、奇怪な花やキノコが見つかった。

まだ誰も気づいてはいないが、いずれ恐ろしいことになる。高樹は心のどこかで、予知のようなものを感じていた。

「よし、これで……」

と、立ち上がりかけたとき、高樹は奇妙な物音を耳にした。最初は虫の羽音に聞こえた。たくさん羽音が飛び回っている音……それは段々大きくなり、キーン、キーンと鳴り始めた。

「うっ」

高樹は耳を押さえ、身体を丸めた。なにかしら異変が生じ始めていた。周囲の空気が奇妙に変化している。身体を締めつける圧迫感があった。その重圧に耐えるかのように、高樹はうずくまった。目だけを上げて、空気が渦巻いている場所を見る。

花畑の中心に、陽炎のようなものが立ち昇っていた。その周辺の花の形がひしゃげ、ゆがんでいる。耳障りな音が、いつそう大きくなった。

無形のエネルギーが、空中で激突するような衝撃があつた。脳髓の芯まで染める強烈な光が炸裂した。

次の瞬間、花畑のどまん中に、いきなり若い女が出現した。強風に煽られて、赤い花びらが宙を舞った。高樹は手で風を避け、必死に目を凝らした。自分の幻覚ではないかと、彼は思っていた。

唐突に、風が止んだ。宙をまわっていた花が、地面に落ちる。

高樹は愕然として、その女を見た。誰もいなかった場所に、突然、現れた女……。

「わたし……」

と、その女は言った。周囲の花と同じような、赤い髪をした若い女だった。メキシコ系の、彫りの深い顔立ちをしている。この時代のものとは思えない、ギリシャ風の白い衣を身につけていた。

女は、高樹の方へ近づいてきた。高樹は立ち上がり、息を呑んで彼女を凝視めた。

彼はその美しさに目を奪われていた。まさに女神のような、気品ある美しさだった。寶石のような碧い瞳が、濡れたようにきらめいている。

「この子を……」

女は高樹の前で足を止め、腕に抱いていた二歳ぐらいの女の子を差し出した。眠って



るらしく、長い睫を伏せている。日本の少女のようだった。黒髪に愛らしい顔立ちをしている。

高樹は、なにがなんだかわからないまま、その子を受け取った。そのとたん、女はよめいて地面に倒れた。

「おい」

高樹はうろたえた。大急ぎで少女を脇へ降ろして、女を抱き起こした。

「おい、君、しっかりしろ」

と、声をかけて身体を揺さぶった。女はなんの反応も示さなかった。高樹は彼女の胸に耳を当てた。

心音は聞こえてはこなかった。女は死んでいたのである。高樹に幼な子を託して安心したのか、安らかな、眠っているような死に顔だった。

高樹は、この突発的な異常事態に混乱しながらも、警察を呼んでこなければと思った。とにかく、死体をこのままにはしておけない。

少女を抱き上げようとした高樹は、そこでまた慄然とした。少女の身体も死人のごとく、冷たかったのである。

「なんだ？　いったいどうなって……」

二つの死体を目の前にして、高樹は困惑した。いきなり空間から現れただけでも異様な事態であるのに、そのうえ二人とも死人とあつては……。

仕方ない、と、高樹は腰を上げた。山を降りよう。そして、警察へ……二、三步、歩いたとき、奇怪なへ声ゝが響いた。

(ウメテ)

と、それは言つた。

(ワタシヲウメテ。ココへ。コノアカイハナノシタへ)

頭の中でへ声ゝが響いていた。高樹は顔を強張らせて振り向いた。女が喋つたような錯覚を覚えたのだ。

むろん、そんなわけはなかった。女と少女は、並んで横たわっていた。気のせいだ。馬鹿らしい……。

そう思つたとき、ふたたびへ声ゝが言つた。

(ウメテ。ココへ！)

それは、抗いがたいなにかを秘めた声音だつた。高樹は引き寄せられるように、女のところへ戻つた。目が憑かれたように光っていた。リュックからシャベルを出し、土を掘り返し始める。

すでに尋常ではなかった。高樹自身、なぜこんなことをしているのか、まったくわかっていなかった。不可思議な力に、操られていたのだ。

女を埋め、今度は少女を埋める穴を掘ろうとした。少女に視線を移す。

「……………」

高樹は驚いて、大きく目をみひらいた。少女の周りが、不思議な光に満たされていたからだ。淡い青色の光……それは、少女の身体から発せられていた。青い光の輪が徐々に広がり、ひととき眩しく光り輝いた。目を焼き尽くさんばかりの光……。

高樹はその眩しさに、一瞬、目を閉じた。

——目を開けたときには、少女が身を起こして彼を見つめていた。黒い瞳がまっすぐ高樹に当てられている。色こそ違え、その瞳の輝きは、赤毛の女にそっくりだった。

「君……」

高樹は、おそろおそろ少女に歩み寄った。生き返った？ そんな馬鹿な……確かに死んでいた。冷たくなっていったのに……。

少女は、そばにきた高樹を見て、にこつと笑った。高樹に向かって手を差し伸べる。その無垢な瞳を拒絶できようはずがない。高樹は少女を抱え上げた。羽のように軽かったが、身体はあたたかかった。死者の軀ではなかった。

少女はマシユマロのように、やわらかい頬を、高樹の髭面にすり寄せた。安心しきっていた。

「君の名前は？」

高樹は、少女の瞳をのぞきこんで聞いた。深い泉を想わせる、美しい瞳が高樹を見返した。

「アスカ」

少女はぼつりと言った。

「アスカ……そうか、明日香か。それじゃ君は、今日から高樹明日香だ」

高樹はリュックとポリ袋を抱えると、少女を抱いて歩き出した。このとき、彼は赤いタンポポの下に埋めた女のことを、完全に忘れ去っていた。記憶からきれいに消えていたのである。そのことになんの疑問も覚えず、高樹はその場を離れて行った。

腕の中の少女は、高樹の肩ごしに赤い花畑を見た。遠ざかって行く毒々しい花の群生、花の下に埋められた、美しい女……。

少女は唇だけ動かして、その場所に別れを告げた。

さようなら、わたし……。

第一章 ターミネイト

一

鈍色の雲が、重くたれこめていた。ミルク色の霧が周囲を白い世界に染めている。通りを走る車はほとんど見あたらず、新宿副都心のネオンの輝きも、今ひとつ冴えなかった。街路を行き交う人々もまた、影のようにうつろだった。みんなやけにゆっくりと歩いている。顔にはまったく生氣がない。

若者の姿が少ないのも異様な感じだった。夜になると着飾った若者たちで活気に満ちていた街が、田舎の商店街のようだ。閑散としている。弛緩したなまぬるい空気が、そこかしこに充満していた。

——土曜の夜のミステリアスゾーン。今日もまた、美しい予言者ヴィナスの、フォーノリジをお届けしましょう……。

街のところどころに設置された、三十インチのテレビが、人気番組「サンサーラ」の放

送を始めた。緊急連絡用にもなる、電話局ご自慢のテレビだ。スイッチひとつで警察や病院に直接繋がるシステムになっている。

歩いていた人々が、足を止め、ひとり、ふたりとテレビの周りに集まってきた。これを見ておかまいと話に遅れてしまう。今、最高に話題の番組だった。

まっ暗な画面の中に、一筋のスポットライトが灯った。その灯りは、豊かに波打つ銀色の髪と、凍てつくような碧い目をした、美貌の女を浮かび上がらせた。女は、身体の線がくつきりと現れる、銀色のドレスを着ていた。銀の髪と銀のドレスが、ライトを浴びてきらきらと煌めいている。美しい女だった。女優をやっても、さぞかし売れるに違いない。カメラがズームアップし、予言者ヴィナスの顔が、画面いっぱいに広がった。碧い瞳が神秘的な光をたたえていた。とほうもなく、不思議な色を放つ瞳だった。見る者をとらえずにはおかまい、一種魔的な力がある。

通行人のほとんどが、画面に釘づけになっていた。群れて人垣ができていた。

「……わたしはヴィナス」

と、形のよい唇が動いた。魅力的な声音だった。少しかすれているところがセクシーだ。「みなさん、今日は重大な予言をお伝えしましょう。これからわたしが言うことを、しっかりとめてください。絶対に忘れてはいけません。心に刻みつけてください」